

水辺からまちをかえる —太田川を走る雁木タクシー—

NPO法人雁木組 氏原 睦子

水の都ひろしま。まちの中心部には旧太田川（本川）、元安川、天満川、京橋川、猿猴川、太田川放水路の6つの河川が流れ、デルタのまちを形づくっている。私たちは、その水と緑にあふれるまちで、川の水上新タクシー「雁木タクシー」を運航している。「街とまちを結ぶ」というキャッチフレーズは、まちのいたるところにある階段状の護岸である約400ヶ所の「雁木」を、のりばとしているからである。

広島は城下町として発達したまちである。15世紀、毛利輝元による築城当時の海岸線は現在の広島市中心部、平和大通りあたりと推定され、前方には広い干潟が広がっていた。江戸時代に入って地先の干拓が進められ干潟部分のほとんどが陸地化し、7本の川を骨格とした城下町がつけられた。築城以来の護岸づくりそのものが、広島のみちづくりであったともいえる。その築堤にあたって、護岸の一部に造られてきたのが「雁木」である。雁木とは階段状の護岸をいい、昭和30年代まで木材などの物資の荷下ろしの場合などに使われていた。1808年に描かれた「江山一覽図」には、多くの雁木と舟が描かれ、舟運で栄えた広島のかつての暮らしぶりをうかがい知ることができる。幅が広く、公共的な雁木もあれば、個人宅にひとつずつ造られた、私的な雁木もある。広島は、瀬戸内海の影響で干満差が大きく、大潮では4mもの差を生じる。満潮時には満々と水を湛えた豊かな水面が街を潤し、干潮時には街なかにも干潟が出現し、多くの生きものが姿をみせるユニークな川だ。

雁木は、こうした干満の大きなまちならではのオリジナルの構造物として発達してきた。私たちは「雁木」に人と川の新しい文化を見出して



広島のみちづくりにつなげようと、雁木にこだわる活動を実施している。現在、雁木タクシーは7人乗りの小型ボート2艇で運航。のりばは50ヶ所強。いずれののりばも市民のニーズに応じて利用実績をつくってきたもので、平成16年秋からこれまでの乗船者は約2万人である。

【できることから始めた雁木タクシー】

広島における水上交通実現にむけては、行政、経済界、市民による研究会、検討会が幾度も実施され、様々な実験的取組みも実施されてきた。それだけ、川がまちづくりに魅力的な要素をもっているといえるだろう。その課題としてあげられるのは次の2つ。

- ①干満差が大きく（1日平均最大で4m弱）、満潮時間は船が橋にぶつかり、干潮時は底をつく。
- ②水上交通といえるほど棧橋の数がない

課題検討の結果はどちらも、インフラ整備による実現を求める内容であった。そこで私たちは、今ある素材を生かしてできることから始めることとした。

「タクシー」の名にこだわったのは、利便性を追求する公共交通ではなく（便利に越したことはないが）、また観光に特化した遊覧船をめざすのでもな



楠木大雁木。幅約23m 木材の荷降ろしに活用された。改修を重ね、現在に至る。（本川右岸）



裏木戸跡の残る雁木。明治中頃に個人が築造したものと推定される。（京橋川右岸） 写真：土居郁夫



戦後に造られた雁木の多くは、川に並行なタイプ。（京橋川右岸/水辺のオープンカフェ前の雁木）。

く、「ハイ、タクシー」と手をあげれば気軽に船に乗ることができる、粋な暮らし方そのものを、まちの魅力として来訪者にも楽しんでいただきたい、という想いを込めたからである。自分たち自身が初めて船から広島をみたときの感動を、1人でも多くの市民に伝えて、まずは市民の意識を川に呼び戻すことからはじめよう、という、畑を耕すような気の長い取り組みである。川から街をみてもらえば、必ず市民の気持ちが動くという自負が私たちにはある。そのために様々な企画を打ち出し、一方で地道な運航を続けてきたその繰り返しが、2万人という数字に反映されている。

【安全運航を支える仕組みづくり】

① 運航のルールづくり

雁木タクシーは「人の運送をする内航不定期航路事業」の届出を行い、NPOが事業主体となって運航している。運航にあたって最重視しているのが「安全」である。雁木利用にあたっては、開始当初から安全性を疑問視する声があったが、私たちは「棧橋こそが安全」という固定概念に対し、川では雁木が安全な施設であることを、安全運航の実績をもって証明することとした。脈々と受け継がれてきた雁木を利用していると、いかに雁木が感潮河川において理にかなった構造物であるかを実感する。私たちは、雁木を利用することで安全のノウハウや知恵を先人から教わっているともいえる。これらのノウハウを蓄積したものが、私たちがつくりあげた運航ルールである。

② 潮汐の変化をデータベースにした「水辺検索システム」

Step1. 日時を絞り込んでください。

2019年2月						
日	月	火	水	木	金	土
	20	21	22	23	24	25
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

Step2. 場所を絞り込んでください。

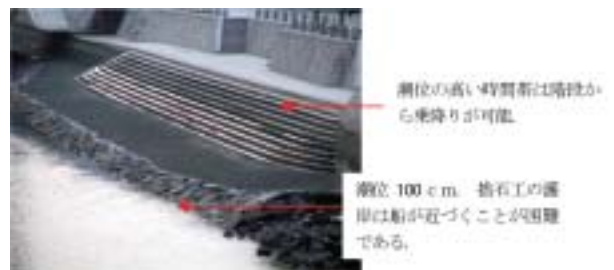
検索サイト
http://www.ganbiki-taxi.com/

HPにて提供している「水辺検索システム」の検索画面

テム」

広島河川の航路が指定されていない。また、海という海図のような情報が、一般に公開されていない。そこでまず私たちは、河床の状況と水深調査を実施することによって、航路を決定する作業を実施した。続いて主要な雁木の満潮時・干潮時の水深を測るほか、雁木の形状や水深、陸側のアプローチなど、乗降りの場として物理的な調査を実施し、データを蓄積した。

これらのデータをもとに、利用情報を市民に提供するシステムづくりを「マイクロソフトNPO支援プログラム」により実現。時々刻々と変化する潮汐(満潮・干潮)を調和定数からリアルタイムに求めるシステムを開発するにいった。特定の日付の各雁木の利用時間を検索web上で提供することにより、雁木組の安全運航を支えるシステムとして日々活用されているほか、誰もが雁木の利用情報を気軽に検索できるようになり多くの市民、来訪者、学校が利用している。さらに、構築した理論潮位を実績潮位で補正する機能も組み込み、システムの精度をさらに高めている。



昔の雁木は河床まで階段状であったが、近年の工事は捨石工が施され、干潮時の着岸は困難(元安川親水テラス)

③ プロボランティアによる運航のサポート

運航には多くのボランティアが携わっているが、全員がプロ意識をもって臨んでいる。現場の陸上ボランティアスタッフの主な役割は2つ。安全な乗降りのフォローと、安全のための雁木掃除である。スタッフは定期的に情報交換をし、法令厳守と具体的なケーススタディにより安全確認を徹底している。



定期的実施している安全講習会。水辺の滞在時間の長いスタッフが、川で遊ぶ子どもたちを見守ることも。

写真：山崎学



網とりと乗降りのフォローが陸上スタッフの仕事。50ヶ所の雁木に常駐するわけにはいかないので、お客様をのせたら、自転車で先回りして、降りるフォローをすることも。



お客さまが滑らないように、ボランティアが雁木を掃除。雁木組のコアメンバーは約20名。雁木メイト（船購入にあたって募った市民オーナー）は約200名。

【水辺の魅力に光をあて、ネットワークする】

広島の水辺には原爆ドームや縮景園などの観光施設や、国際会議場などの集客施設が多くある。これらの施設と主要駅、あるいは施設間を船で結ぶコースを企画し、商品化する。コースの途中にある、埋もれていた資源に光をあてることで、市民にも来訪者にも、新しい発見を楽しんでいただいている。

＜縮景園クルーズ＞

平和公園から縮景園上流の雁木を結ぶ便。名勝縮景園にある雁木は、現在閉鎖中で船を着岸することができないが、船上ガイドさんと縮景園のガイドさんが、お客さまを橋渡しする形で、園の裏側からの入場を可能にし、実現したツアーである。

＜マツダズームズームスタジアム便＞

2009年春にオープンしたばかりの新球場へ、平和公園から直行する企画便。お客様もスタッフもカープ一色で街なかを走り抜ける、賑やかな便である。

＜水辺のオープンカフェ便＞

河川利用の特例措置として実験的に営業をしている水辺のオープンカフェ（京橋川）と平和公園を結ぶ約30分のコース。

【まちへのはたらきかけ】

広島の水辺は市民によるイベントが活発だ。イベント主催者との共同企画により特別運航をして賑わいの相乗効果をもたらしたり、複数の会場をネット

ワークするなど、まちづくりを目的とするNPO法人ならではの幅広い動きも、雁木組の自慢である。

雁木組が自らイベントを主催することもある。太田川でしじみ漁を営む漁協組合と連携し、太田川産しじみのブランド化の協力をしている。一流のシェフを招いてのPRやしじみの勉強会、稚貝の放流など、女性の多い雁木組ならではの企画である。

「雁木クリスマス&水辺JAZZ」は、京橋を挟んだ兩岸の地域と水辺に立地する企業によびかけて実施している冬のイベントである。日頃は橋を足早に通る過ぎるサラリーマンに、しばし水辺で足をとめてもらおうと、平日の夜に実施している。また、雁木を地域の皆さんとライトアップすることによって、昼間は気づきにくい雁木の存在をアピールし、地域の財産としての認識を高めている。

水辺にあるほとんどの町内会の地先には雁木がある。地域の人たちに雁木と雁木タクシーに愛着をもっていただけるよう、地域への働きかけは今後も続けていく。



水辺の映画会

～ポップラ劇場2008「夕凧の街 桜の国」市民野外上映会～
写真提供：坪島 遊（2008年5月31日撮影）
広島駅から会場へのシャトル便を運航した。



「雁木クリスマス&水辺JAZZ」雁木組の若手女子チーム「がんぎーず」のアイデアが活きたイベント。

【使いながら残す- 雁木の歴史性調査】

雁木組では、雁木の歴史的価値を確認し保存につなげるプロジェクトを平成17年から実施している。6本の河川のうち近年の高潮対策事業が施されていない京橋川右岸上・中流域（工兵橋から稲荷橋の約2.6km）には見ごたえのある護岸および雁木が連続する。中でも栄橋から京橋にかけては裏木戸跡や美

しい切り込み剥ぎの護岸などが残る。この区間について、築造年代の特定と、保存に値する文化財的価値を見出すための現状調査を行った。まず着眼したのは、雁木およびその周辺の護岸の石積みの特徴(練積み・空積み、加工の程度、積み方など)である。結果、護岸は区間ごと、おそらくかつての屋敷単位で多様な形式であることがわかり、それらをグループ化して相対的な年代区分を確定した。(調査協力：三浦正幸氏(広島大学教授))

調査報告：川後のぞみ氏(広島大学/NPO法人雁木組)ほか

その後、文献調査、地域へのヒアリング調査を通じて、技術調査の裏づけを行い、この区間の雁木は明治中期頃に護岸とともに築造されたことが明らかになった。(調査協力：本田美和子氏((財)広島市文化財団広島城)ほか)

これまで河川の雁木群について内外に知られることはあまりなかったが、雁木タクシーが船着場とし再活用をはじめたことと、この調査結果が裏づけとなって、平成19年度「選奨土木遺産」((社)土木学会)に選定されるにいたった。

調査活動は、現在も進行中である。その後、「歴史クルーズ」として、雁木タクシーで水辺の歴史を紹介する企画が実現したり、地域の皆さんと一緒に石垣の草を取り除いて保全する活動へと展開している。

また、平成20年には、伝統的工法を受け継ぐ石工さんと、崩れた歴史的護岸を修復するシビクトラストを実施した。

都市の中で奇跡的に残り、いまでも現役の護岸として活躍する雁木群。今後も本来の用途である「船着場」として、活用しながら地域の人たちと一緒に大切に残していきたい。



メンバーと三浦先生による調査(平成17年11月)



京橋川の護岸と雁木。精度の高い切込剥ぎは当時の石工の技術をうかがわせる
写真：土居郁夫

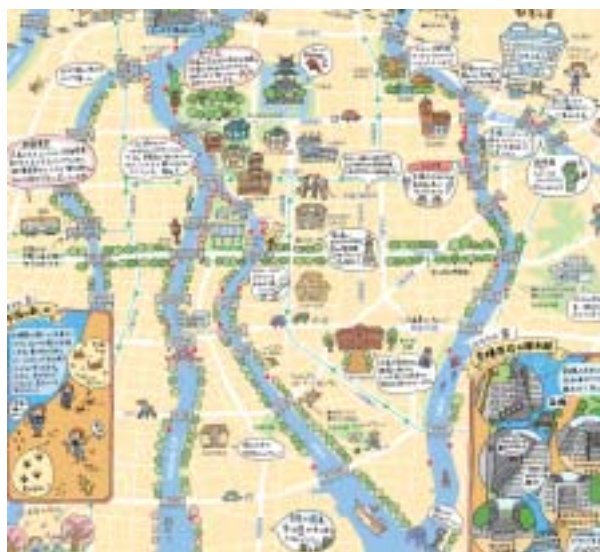


舟つなぎ石。もやい塚ともいう。昭和初期まで活躍していたこの石は、昭和50年代に上部が壊れて失われていたと思われる。地元の人は大切なものを捨てることはない、という年配者のアドバイスに従って、雁木組メンバーで搜索したところ、100m下流の河床に埋もれていた石をみつけだし、修復。(本川右岸)

【物語を綴るサポーターとしての雁木タクシー】

雁木タクシーの定着とともに、移動手段以外の利用が市民の皆さんによって提案されはじめている。川沿いの病院に入院する母親に、船の上から歌とプラカードで誕生日のお祝いをする若い兄弟たち。結婚式で花嫁と花婿が船で登場。修学旅行で広島を訪れる小中学校の「とうろう流し」のお手伝い(船でとうろうを回収)など。運航のしくみを構築したことで、船は水辺のさまざまなニーズを実現する道具として、市民の役に立ちはじめたことは、嬉しい成果である。今後どのような物語を綴るお手伝いができるのか、とても楽しみである。

写真：特記以外は筆者



NPO法人雁木組

TEL 082-230-5537

<http://gangitaxi.etowns.net/>